

## 神のご支配が始まる

[ミカ書 4章 1~4節]

終わりの日に

主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち

どの峰よりも高くそびえる。もろもろの民は大河のようにそこに向かい  
多くの国々が来て言う。

「主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。主はわたしたちに道を示される。わたした  
ちはその道を歩もう」と。

主の教えはシオンから 御言葉はエルサレムから出る。

主は多くの民の争いを裁き

はるか遠くまでも、強い国々を戒められる。

彼らは剣を打ち直して鋤とし 槍を打ち直して鎌とする。

国は国に向かって剣を上げず もはや戦うことを学ばない。

人はそれぞれ自分のぶどうの木の下 いちじくの木の下に座り

脅かすものは何もないと 万軍の主の口が語られた。

[1] 「イマジン」

平和な世界を願い、ジョン・レノンが今から 50 年も前に作った有名な歌に「イ  
マジン」という曲があります。皆さんもこの曲が好きだという方は多いのではな  
いかと思いますが、ある時、その歌詞を読んで少しショックを受けたことがあり  
ます。こんなような歌詞なのですね。

イマジン—想像してごらん 天国なんて無いんだと  
ほら、簡単でしょう？ 地面の下に地獄なんて無いし 僕たちの上には ただ  
空があるだけ さあ想像してごらん みんなが ただ今を生きているって...

想像してごらん 国なんて無いんだと  
そんなに難しくないでしょう？  
殺す理由も死ぬ理由も無く そして宗教も無い  
さあ想像してごらん みんなが ただ平和に生きているって...

僕のことを夢想家だと言うかもしれないね でも僕一人じゃないはず

いつかあなたもみんな仲間になって きっと世界はひとつになるんだ…  
と続きます。

まあ、ジョン・レノンは、人間の主義主張のぶつかり合い、自分の国の豊かさばかりを願うこと、さらに宗教同士が神様を持ち出して争いをしている。そんなのおかしくないかい、と言っている訳ですよ。でも、「想像してごらん、天国なんてない」というのは、もっと「今」のこと、現実を注視して手を取り合って生きようという意味もあるのでしょうけれども、天国などない、また宗教もないという歌詞は、あまりに刹那的と言いますか、現世主義的、人間中心主義になってしまわないだろうかとは私は思ってしまいます。イマジン。確かに想像することは大事だと思います。でも私たちは、神様を信じる者として、この歌を受けながらも、ここで「想像してごらん。思いめぐらしてごらん。イエスがあなたの味方であるということ。彼(イエス)はこの世を超えても決してあなたを見捨てることはないということ」と言えるのではないかと思うのです。

## [2] ミカが描いた平和—争いが終わる時

今日の聖書箇所である旧約の預言者ミカも、単に現実逃避の「想像」の世界だけに生きた人物ではありませんでした。彼は南イスラエル・ユダの国の一員で、農夫でもあったと言われますが、置かれている現実を直視しながら、不正や搾取を行う者、自己保身に走る支配者や宗教家などに厳しい言葉を語りました。とても勇気がある人だと思います。口をつぐむ方が楽なのですから。そして、彼がいたモレシエト(1:1)という郊外の村の中には、エジプトにつながる道もあって、大国のアッスリアやエジプト、ペリシテなどが戦う時には彼はいつもその戦争を間近に感じていて、その戦いに明け暮れる世界を憂いて、人間が神様に立ち帰ることの重要性を語りました。「主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。主はわたしたちに道を示される。わたしたちはその道を歩もう」(4:2)とあります。そして、やがて神様ご自身がこの世界を和らげて下さるという「平和」の預言を語ります。

“預言”と言うのは「神の言葉を預かる」という意味です。自分の主義主張ではありません。ですからその言葉は多くの場合歓迎されませんでした。「寝ぼけたことを言うな」位なものでしょう。だから預言者は苦しむのです。しかし、それでも神に立てられた預言者は語ります。それは、目の前のこの世界の現実だけが全てではないのだということを知ってもらいたい、という強い思いが彼らを駆り立てていたでしょうし、それは何よりも神様からの「約束(契約)」に裏打ちされていたものだったからです。単なる「イマジン(想像)」ではないのですね。

このミカ書、4章の所には「終わりの日の約束」と小見出しがついています。ここではミカは「争いが終わる世界」を描いています。「イマジン」と同じように。けれども夢想やファンタジーではないのです。3節にあるように、争いを裁く(解決する)主が来られると言うのです。そしてこの主は、戦いの道具である槍や剣を、土地を耕す(命の種が育つために)道具である鋤や鎌に打ち直すのだ、と語っています。適切な言い方ではないかもしれませんが、それは鉄口から花が開くようなものです。それはマジックではありません。本当に主イエス・キリストがして下さったことです！ミカが語った言葉は、その700年後に、この一人の人によってリアルな事柄になったのです。槍や剣、鉄砲、爆弾、それが世界を支配するのではない。そう見えるのが「現実」だけども。だから「私たちの安全と安心のためには抑止力が必要だ」と言って防衛費と言う名の軍事費もどんどん増えるのです。それが現実だから仕方ないのでしょうか？けれども、罪と罪が戦ってもそこに救いはないのではないのでしょうか。これまでの歴史はそれを物語っているでしょう。けれども、その人間の醜さ、弱さ、傲慢(それは実に私たちのことです！)、それを全部ご自分の身に引き受けて下さったお方の愛、そしてそのように独り子イエスを送って下さった神様の愛だけがこの世界の真の希望です。

詩編 103 編 10~11 節にこういう言葉がありますね。「主はわたしたちを罪に应じてあしらわれることなく、わたしたちの悪に従って報いられることもない。天が地を超えて高いように、慈しみは主を畏れる人を超えて大きい」。実に、神様は愛なのです。

### [3]「今よりとこしえに、主が彼らの上に王となられる」

今日読んで頂いた少し先で、ミカは4章7節において、高らかに宣言しています。「シオンの山で、今よりとこしえに、主が彼らの上に王となられる」。—主なる神様のご支配が今から始まる、と言うのです。シオンの山とはエルサレムの丘のことです。当時はそこが神様がおられる所だと捉えていました。ですからソロモン王はそこに立派な神殿を建立しました。けれども、世界の主は、そこにだけ、限られた場所にだけおられるのか。そうではありませんよね。この世界を創造されたお方は、全ての人を救うため、寄り添うため、本当に低く低くなって、人間の姿を取って、誰よりも弱い赤子となって、あの家畜小屋の馬小屋に生まれて下さったのです！神の御心は、この世の現実がどうであろうと誰ひとり見捨てないということです。

あのクリスマス物語に出てくる寒空に野宿しなければいけなかった羊飼いたちは、神殿詣でをして礼拝することなんて出来なかったのです。けれども、彼らの場所にも主は来て下さいました！人間はみな、神に愛されている神の子なのです。「神の国は、実にあなたがたのただ中にあるのだ」とイエス様はおっしゃ

いました。本当にそうです。イエス様が私たちの人生の中に、ただ愛そのものの方として入ってきて下さったのですから。そのことをはっきりと示して下さい、リアルな出来事が、クリスマスです。あの馬小屋で、あの十字架で、「今よりとこしえに、主が彼らの上に王となられる」。

新しい世界史、神様のご支配が始まりました。

来週もミカ書から聞いてゆきたいと思いますが、このアドベント、主は本当に生まれて下さったのだ！それは現実の、リアルなことなのだという感謝を深くしてイエス様を新しくお迎えしたいと思います。

お祈り致します。

神様、アドベントの第二週の礼拝をありがとうございます。このクリスマスの時期、ひょっとすると私たちはただ忙しく過ごしてしまうか、或いは私にはクリスマスなど関係ないと過ごしてしまうということもあるかも知れませんが、どうぞ、今立ち止まり、あなたからの愛の語りかけに耳を傾け、イエス様の深い愛の中に立ち帰ることが出来ますようにお導き下さい。

単なる想像ではない、まことの神様が私たちと共におられる！この喜びのおとずれを一人でも多くの方々と共有出来ますように。

主イエス様のお名前によって祈ります。

アーメン。